

パフォーマンスなダークツーリズムの可能性

——「パフォーマンス性」概念に関する批判的な検討を通じて——

遠藤 英樹

I はじめに

本稿の目的は、“死”や“苦しみ”を背負ってきた他者に寄り添い、大切にするための「ふるまい」を学ぶうえでダークツーリズムが有する豊かな可能性を切り拓くことにある。

以下ではまず、ダークツーリズムを「人為的にもたらされた“死や苦しみ”と結びついた場所へのツアー」「自然によってもたらされた“死”や“苦しみ”と結びついた場所へのツアー」「人為的なものと自然の複合的な組み合わせによってもたらされた“死”や“苦しみ”と結びついた場所へのツアー」の3つに分類するとともに、ダークネスの濃淡によって生じる「ダークツーリズムのスペクトラム」についても述べる。

次に、ダークネスがつねに社会的に構築されるものであることを指摘し、ダークツーリズムにおいては「それが誰にとってのダークネスなのか（ダークネスでないのか？）」「どのような状況のもとで、どのようなものをダークネスとする必要がある（なかった）のか？」「あるものをダークネスとする（ダークネスとしない）ことで、得られるもの、失うものは何なのか？」などを問うことが重要であると主張する。

そのうえで、ダークツーリズムの問題点として、ひとつに「“死”や“苦しみ”に対するまなごしの暴力性」、もうひとつにダークネスを観光資源化することによる「“死”や“苦しみ”の商品化」を挙げ、これらについて考察を加えていく。最後に、「パフォーマンス性」という概念を批判的に検討しつつ、これらの問題があるにもかかわらず、ダークツーリズムに秘められた可能性を切り拓いていくべきであることを論じる。

II ダークツーリズムの分類

「ダークツーリズム」とは何か。これについては、研究者間でもまだ一致した定義があるとは言えないものの、少なくとも「死や苦しみと結びついた場所を旅する行為」とする点では定義を共有しているのではないか¹⁾。すなわち、「戦争や災害の跡などの、人類の悲しみの記憶をめぐる旅」が「ダークツーリズム」なのである²⁾。ここでは、ひとまず、それをもって定義としておきたい。この「ダークツーリズム」については、訪問される場所によって以下3つに分類できる。

(1) 人為的にもたらされた“死”や“苦しみ”と結びついた場所へのツアー

「ダークツーリズム」には、戦争、テロ、社会的差別、政治的弾圧、公害、事故など人為的にもたらされる“死や苦しみ”と結びついた場所を訪問する行為がある。原爆ドームを訪問するツアーも、

これに含まれるであろうし、ポーランド南部に位置する「アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所」へのツアーも、これに分類されるであろう。「アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所」は、第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって推進された人種差別的な抑圧政策のもと、数多くのユダヤ人、政治犯、精神障がい者、身体障がい者、ホモセクシャルたちが収容され虐殺された場所で、原爆ドームと同じく「負の世界遺産」として1979年にユネスコ文化遺産に登録されている。

ニューヨークの「グラウンド・ゼロ」へのツアーも、こうしたものに含まれよう。「グラウンド・ゼロ」は、2001年9月11日にアメリカ合衆国で発生し3千名を超える命が失われたテロ事件の爆心地のひとつ「ワールド・トレード・センター」があった場所である。ここは現在、「ワンワールド・トレード・センター」が建てられており、大きく様変わりしているが、テロ事件が起こって間もない翌年の2002年頃には犠牲者の死を悼むために多くの人びとが訪問する光景がみられていた(図1)。

ベトナム・ホーチミン市を中心にひろがるクチ・トンネルのツアーも、この分類に属する。クチ・トンネルは、ベトナム戦争中に、南ベトナム解放民族戦線によってゲリラ戦の根拠地としてつくられたトンネルである。また、未曾有の原発事故を起こしたチェルノブイリ原発へのツアー、病気による差別をうけた人びとの苦しみに思いをはせるために訪問されるハンセン氏病の療養所、イタイイタイ病や水俣病をはじめ多くの公害病に関連した場所を訪問するツアーも、これに分類できるだろう。



図1 2002年におけるグラウンド・ゼロ周辺の風景
資料出典：筆者撮影(2002.09.05)

(2) 自然によってもたらされた“死”や“苦しみ”と結びついた場所へのツアー

「ダークツーリズム」にあっては、自然災害によってもたらされる“死や苦しみ”と結びついた場所へのツアーも、忘れてはならない。井出は自然災害を、地震災害、津波災害、火山災害、台風の4つに整理している³⁾。

「地震災害」の例としては、阪神・淡路大震災を挙げることができるのではないか。1995年1月17日午前5時46分、突如、大地は上下に大きく揺れ、多くの家屋や建造物が崩れ落ち、火災があちこちに発生した。その結果、多くの人命が失われ、甚大な被害を生じさせた。この震災をうけて「人と防災未来センター」が、阪神・淡路大震災の記憶を風化させることなく後世に伝え、防災・減災の世界的拠点となることを目的に神戸市中央区に創設された。ここへの訪問は、自然によってもたらされた“死や苦しき”と結びついた場所へのツアーになるだろう。また「津波被害」の例としては、2004年12月26日にインドネシアのスマトラ島をおそった大津波があり、この記憶をつたえる「アチェ津波博物館」を訪問するツアーが組まれたりしている。

(3) 人為的なものと自然の複合的な組み合わせによってもたらされた“死”や“苦しき”と結びついた場所へのツアー

自然災害は、発生した後の対応など人為的な要素によって、いっそう被害を拡大させることがある。これについては、東日本大震災の事例を挙げることができる。

2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0という日本周辺観測史上最大の地震が発生した。この地震とそれに伴って発生した津波などによって、1万8千名をこえる死者・行方不明者をだした。同時に、津波におそわれた東京電力福島第一原子力発電所が全電源を喪失し原子炉を冷却できなくなり、炉心溶融（メルトダウン）が発生した。その結果、大量の放射性物質を漏洩させる事故を起こしたのである。その後、事故は収束にむかうことなく、原子力発電所近辺の福島県一部地域は「帰還困難区域」「居住制限区域」に設定され、避難生活の長期化を余儀なくされた。

このことをまのあたりにして東浩紀たちの研究グループは、『福島第一原発観光地化計画』という書物を出版した⁴⁾。そこでは「ダークツーリズム」を軸に、震災と事故の記憶を風化させることなく“死や苦しき”に深く思いをはせる重要性がうたえられている。ここで計画されているツアーなどは、第3番目のものに位置づけられるものと言えよう。

以上のように分類されるダークツーリズムは、その濃淡によっても整理することが可能である（図2）。図をみると、「目的が教育志向か娯楽志向か」「保存を重視しているか商業性を重視しているか」「真正性を知覚できるか否か」「真正性がローカリティと結びついているか否か」「最近に起きたことか昔に起きたことか」「作為的な意図が含まれているか否か」「観光のインフラストラクチャーとして整備されているか否か」によって、「非常にダーク」なツーリズムから「非常にライト」なツーリズムまで、さまざまな段階があることが分かる⁵⁾。

ダークな色彩が強まるほど、観光地は、「死と苦しき」を直接的に体現した場所となる。たとえば東日本大震災の被災地をめぐる旅は「非常にダーク」なツーリズムに位置づけられるだろう。逆に、かつて病院として用いられていた建物を娯楽用につくりかえたホラーハウスを訪れたり、「クリプト・ツーリズム」のように妖怪をテーマとして観光したりすることは、ダークツーリズムの中でも「非常にライト」なものに位置づけられる。こうした場所は「死と苦しき」に無関係であるとは言えないが、あくまで娯楽の意図のもとで「死と苦しき」を指し示しているのである。



図2 ダークツーリズムのスペクトラム

資料出典：Sharpley, R. and Stone, P. eds.: *The Darker side of travel: The theory and practice of dark tourism*, Channel View Publications, 2009. p.21

Ⅲ 社会的に構築される「ダークネス」

観光研究において「ダークツーリズム」という概念をはじめに積極的に用いたのは、雑誌『インターナショナル・ジャーナル・オブ・ヘリテージ・スタディーズ』に掲載されたJ. レノンとM. フォーレーによる1996年の論稿においてである⁶⁾。レノンとフォーレーはその後、『ダークツーリズム——死と災害のアトラクション』という本を執筆し、この言葉は新たな観光のあり方のひとつとして急速に注目を集めるようになった⁷⁾。

もちろん現象としてなら、「死や苦しみと結びついた場所を旅する行為」は、もっと以前から存在していたのかもしれない。たとえばアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所へのツアーはかなり以前から行われていたし、原爆ドームへのツアーもかなり以前から修学旅行などに組み込まれていた。そのように考えるなら、「現象としてのダークツーリズム」は、決して新しいものではないと言

える。では何をもって、「ダークツーリズム」が新しいとされているのだろうか。それは、以前から存在していた多様な観光現象を、「ダークツーリズム」という同一の概念でくくるといふ点にほかならない。

アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所など戦争による苦しみに思いをはせるツアー、チェルノブイリ原発事故など事故による苦しみに思いをはせるツアー、阪神・淡路大震災など自然災害による苦しみに思いをはせるツアーなど、場所もコンテキスト（文脈）も何もかも異なっているにもかかわらず、そういった違いをこえ、すべてを“人類の歴史”における負の産物をめぐる旅であるとみなしていく。そのために必要だったのが、「ダークツーリズム」という概念装置ではないだろうか。場所もコンテキスト（文脈）も異なる多様な観光現象を、「ダークツーリズム」という同じ概念でくくるといふ点にほかならない。それによって初めて、われわれは、“人間の歴史”という近代的な普遍性に刻印づけられた枠組（M. フーコーの議論にあるような）のもとでの問いかけを、観光で志向できるようになったのである⁸⁾。

それゆえ「現象としてのダークツーリズム」「概念としてのダークツーリズム」という区別をふまえるならば、新しいのは「現象としてのダークツーリズム」ではなく、「概念としてのダークツーリズム」なのだと言える。「概念としてのダークツーリズム」を地域のなかへとインストールすることで、“死”や“痛み”でさえステレオタイプ化されていない視角からとらえかえし、新しい観光資源に変えていくことができるようになる。

ただし“死”や“痛み”と結びついた場所があれば、その場所が自動的に「ダークツーリズム」の対象となるかという点、そういうわけでもない。戦跡や災害の被災跡などが保存されていたとしても、観光客が「観光されるべきダークネス」として、そのまなざしを向けるように方向づけられていないのであれば、「ダークツーリズム」の対象になることはないのである。このことについて、シンガポールのシロソ砦を事例に考えてみたい。

シロソ砦はシンガポール南部にあるセントーサ島に位置しており、1880年にイギリスにより建設された要塞である。日本軍がシンガポールを攻略したとき、イギリス軍がここにたてこもって迎え撃っている。日本軍占領時代には戦争捕虜の強制収容所として用いられ、現在は「シロソ砦の戦争記念館」として砲台なども復元されている。いまは、要塞の中を観光客がみることができるよう整備され、英語で現地ガイドのツアーも行われている。ほかにもさまざまな戦跡の展示があり、イギリス軍が日本軍に無条件降伏したときの様子を蠟人形で再現したコーナーもある。

シンガポールにとってシロソ砦は、第2次世界大戦の深い傷あとを残した場所である。しかし、多くの観光客がシロソ砦を「観光されるべきダークネス」として、そのまなざしを向けているかという点、そうでもなく、調査時においても戦争当事国の国民だったはずのイギリス人や日本人も含め、ほんの少ししかシロソ砦をみにきてはいなかった。にもかかわらず、海外からの観光客のうちセントーサ島を訪れる人は、年間を通して非常に多いのである。とすれば彼らはいったい、セントーサ島のどこを観光しているのだろうか。それは、カジノ、ユニバーサル・スタジオ・シンガポール（USS）、海洋水族園マリン・ライフ・パーク、マライオン・タワーなどセントーサ島にあるリゾート施設だ。観光客のほとんどは、こういったリゾート施設を観光するのである。

これら林立するリゾート施設は、シンガポール政府の観光政策の成果とも言えるものである。この島は、かつてマラリアが流行し多くの死者をだしたことから、マレー語で「プラウ・プラカン・マティ（背後の死者の島）」と呼ばれていた。かつて作家である井伏鱒二も「死の彼方」と呼び、島に

は暗いイメージが付きまとっていた。第二次世界大戦のときも、この島は戦禍の象徴のような場所になり、島はより暗いイメージでおおわれるようになった。そこで政府は、イギリスから返還された後、島の名称を「セントーサ（静けさ）」というリゾート的な雰囲気のものにあらため、セントーサ開発公社を設立し、この場所の観光開発を重要な政策のひとつと位置づけたのである⁹⁾。

このような観光政策からするならば、＜ツーリストのまなざし＞の中でシロソ砦が「観光されるべきダークネス」として映り、「ダークツーリズム」の対象となることは決して好ましいことではないだろう。政府だけではない。セントーサ開発公社もまた、そうではないか。また、ここで営業しているテーマパーク、カジノ、ホテル、レストラン、土産業等の関係者も同じ思いであろう。さらに数多くのツーリストをセントーサ島のリゾート施設におくりこんでいる旅行会社の人びとも、同様だ。政府、セントーサ開発公社、テーマパークやホテル等の関係者、旅行会社、彼らはすべて、セントーサ島が明るく楽しいリゾート施設だと＜ツーリストのまなざし＞の中で映ることを望んでいるのである。

鹿児島県「知覧特攻平和会館」も、「ダークネス」が社会的に構築されるということをよく表している場所である¹⁰⁾。ここは、第二次大戦期に戦死した兵士の遺品や関係資料を展示している施設だ。訪問者たちは、この場所が、映画『永遠の0』で描かれたように「特攻」で若者たちが貴い命を散らせるため飛び立った出撃地であると思い、彼らの遺品を見て涙する。

しかしながら、この場所はそもそも実は陸軍の基地であり、日本海軍の艦上戦闘機であるゼロ戦とは何の関係もない¹¹⁾。したがって中央展示室で展示されているのも、ゼロ戦ではなく、陸軍の戦闘機「隼」なのだが、そのことを施設関係者もそれほど強調することはない。むしろ、そうした違いを無化し、ここを海軍の特攻基地と同様の「国や家族のために自分たちの命を犠牲にしてくれた若者たちを悼む」場所として強調し、観光客を惹きつけようとする。この場所は、観光という文脈において観光業者、『永遠の0』制作者をはじめとするメディア産業、政治家などの思惑・利害と結



図3 シロソ砦戦争記念館
資料出典：筆者撮影（2015.02.28）



図4 リゾート感あふれるセントーサ島の風景

資料出典：筆者撮影（2015.02.28）



図5 鹿児島県「知覧特攻平和会館」

資料出典：筆者撮影（2015.09.21）

びつきつつ、「特攻の聖地」へと創りあげていった場所なのである。

このように、たとえ戦跡や災害の被災跡などが保存され、それが歴史的にどれほど重要であったとしても、観光にかかわる人びとが、それを「観光されるべきダークネス」として構築していかない限り、その場所は「ダークツーリズム」の対象になることはない。観光の文脈における政治性が、「ダークネスに対するまなざし」を創りあげる（あるいは創りあげない）のである。その意味で、ある

場所をダークツーリズムで観光するという行為じたいが、すでに、中立的ではないメッセージを帯びた行為となっている。

“死や苦しみ”がそのまま、「ダークツーリズム」の対象となるのではない。そうではなく、ある国や地域の中で観光にかかわる人びとが、“死”や“苦しみ”を「観光されるべきダークネス」として構築しようとする、その限りにおいて初めて、ある場所の“死”や“苦しみ”が「ダークツーリズム」の対象となるのである。

「ダークツーリズム」においては、「それが誰にとってのダークネスなのか（ダークネスでないのか）？」「どのような状況のもとで、どのようなものをダークネスとする必要がある（なかった）のか？」「あるものをダークネスとする（ダークネスとしない）ことで、得られるもの、失うものは何なのか？」などを問うていく必要が生じるであろう。

IV “死”や“苦しみ”に対するまなざしの暴力性と商品化

では、なぜわれわれは、「ダークツーリズム」に魅せられるようになっているのだろうか？この問いについては、観光研究者 D.M. ブーダの論文がヒントを与えてくれる¹²⁾。この論文でブーダは、紛争地域を訪れる「ダークツーリズム」を事例に、「死の欲動」をキーワードとしながら論を展開する。「死の欲動」とは、精神分析学者 S. フロイトのキーワードのひとつである。

“死”“苦しみ”は、“生”“喜び”と隣り合わせにあるべきもので、日常性のもとにあるはずのものである。“死”“苦しみ”はつねに“生”“喜び”と相克しながら、日常を形成している。フロイトによれば、自己破壊的な行動や苦痛へみずから投じるような行為へと駆り立てる「死の欲動」は、未来を生きようとする「生の欲動」とつねにセットとしてあるのだ¹³⁾。

しかしながら、現代人は、日常性のなかに“死”や“苦しみ”を組み込むことを怠ってきた。“死”や“苦しみ”は現代社会の中で否定的なものとして、できるだけ遠くに追いやられ、みえないようにされ、漂白され「抑圧」されてきたのではないか。人、モノ、資本、情報、知等が国境を越えて移動するモバイルな世界において、「秩序なき、新自由主義的な資本主義は、貨幣のフローに対する障壁を失くし、オフショア化された金融市場を拡大」させる¹⁴⁾。とくに、そうした恩恵に浴している欧米や日本、シンガポール、ドバイ等の大都市圏に居住する富裕層は、人の死体はおろか、動物の死体さえ見ることほとんどなくなっている。

「ところが、抑圧されたものは、たんに抑圧されるがままに留まっているわけではない。それは……代替物を送り込もうとする」¹⁵⁾。社会において「抑圧」されたものは、かならず別のかたちとなって「回帰」するのである。ダークツーリズムは、現代社会において抑圧されたものの代替物として、抑圧されたものが「観光の形態のもとで」回帰してきたものであると考えられないだろうか。観光とは、日常性と異なる視点を創り出す作用を通じて成立する現象である。ダークツーリズムのもとで、日常性を形成するものであるはずの“死”や“苦しみ”が「究極の非日常」へと変換され、人びとは、現代社会が「抑圧」してきた“死”や“苦しみ”を覗きみたい衝動に駆り立てられるようになっている¹⁶⁾。いま「ダークツーリズム」に注目があつまるようになっているのは、そのことと深く関係しているのかもしれない。

だが、そのことは同時に、“死”や“苦しみ”に対するまなざしの暴力性をはらむことでもある。た

例えば阪神・淡路大震災の跡をめぐるダークツーリズムのことを考えてみてもよいだろう。この震災が発生してからすでに20年以上の歳月が経過したとはいえ、震災を経験した人びとのなかには、倒壊してきた家具にふさがれ何時間も出られなくなったためにPTSD(心的外傷後ストレス傷害)にかかった人がいるし、愛する家族を一瞬に喪った現実を受容できずに今も苦しんでいる人がいる。そうした人びとにとって、「震災」は決して終ってはいない。彼らは、いまだ終らぬ「震災」を生き続けているのである。そのかたわらで「震災」を観光するとき、たとえ真摯な気持ちで祈りをささげたとしても、そこを訪れる観光客は“死”や“苦しみ”をみずからの日常性として経験しているのではなく、あくまで非日常的な観光対象として見ようとしているのであると言える。

観光客のまなざしの中で、他者の“死”や“苦しみ”は「見られるべき対象」へと変えられてしまう。このような暴力性がダークツーリズムにはある。真摯に悼み祈りながらの旅であれ、日常性を形成するものであるはずの“死”や“苦しみ”を「究極の非日常」へ変換し覗きみようとしていることには変わりがない。それは、「究極の非日常」に変換された他者の“死”や“苦しみ”なのであって、決して自分自身の日常性のもとにあるみずからの“死”や“苦しみ”ではないのである。

さらに“死”や“苦しみ”を観光対象として覗きみるばかりではなく、それを楽しむことができるようにと、“死”や“苦しみ”を「売りにする」＝「商品化する」ケースも起こり得る。

この事例のひとつとして、ドイツ・ベルリンにあるチェックポイント・チャーリーを挙げることができる。チェックポイント・チャーリーは、第二次世界大戦後の冷戦期にドイツが東西に分断されていた時代の1945年から1990年まで、東ベルリンと西ベルリンの境界線上に置かれていた国境検問所である。この場所では、かつて“死”や“苦しみ”に関わるさまざまな出来事があった。1962年には、東ドイツの青年が西側へ脱走しようと、チェックポイント・チャーリー近くの壁をよじ登ったところを東ドイツの警備兵に銃撃された事件が起こったりしたのである。さらに検問所がかつてあった場所の近くには、1963年に開館したチェックポイント・チャーリー博物館があり、ドイツが東西に分断されていた頃の悲しみの記憶を忘れないようにと、東ドイツから脱出を試みた人たちの写真、脱出の際に用いられたトランクなどが展示されている。このように、チェックポイント・チャーリーはダークツーリズムにとって重要な場所となっている。

しかしながら現在、この場所はベルリン有数の観光名所として売りにされており商品化されるにいたっている。いまこの場所にいくと、検問所にあった木造の小屋を東西ドイツ統一後に再現したものが建てられており、ここで観光客たちが国境警備兵の格好をした観光スタッフと一緒にポーズをつけて写真を撮る光景が見られる。また博物館にはベルリンの壁に関連したグッズが売られるショップがあり、ベルリンの壁の一部(という名目のもの)をキーホルダーにした商品も購入することができる。

そこに真摯に悼み祈る気持ちがないとは言えないかもしれない。実際、ほとんどの観光客たちは博物館の展示を見学しているとき、真剣な面持ちで解説を読みながら静かに展示物を見ている。だが同時に、この場所では、“死”や“苦しみ”を観光対象として楽しみながら覗きみられるようにとさまざまな工夫がほどこされているのだ。



図6 チェックポイント・チャーリー博物館
資料出典：筆者撮影（2017.06.04）



図7 チェックポイント・チャーリーの小屋で写真を撮る観光客たち
資料出典：筆者撮影（2017.06.04）

V パフォーマンス的なダークツーリズム

ダークツーリズムが日常性を形成するものであるはずの“死”や“苦しみ”を「究極の非日常」へ変換し覗きみようとするものであり、それゆえにまなごしの暴力性をはらみ商品化まで生じさせるものであるならば、ダークツーリズムによって他者の“死”や“苦しみ”を「理解」することは不可

能なのか。

不可能である。

“死”や“苦しみ”の場所をめぐるツーリストたちにどれほど真摯さが備わっていたところで、それは他者の“死”や“苦しみ”であって、自己の“死”や“苦しみ”ではない。ダークツーリズム研究は、そのことを直視することから始めねばならない。だが、「理解」することが不可能であると言うなら、結局のところダークツーリズムは、他者の“死”や“苦しみ”を観光商品として売り買いし消費する、うわついたものに過ぎないのではないか。

これに対する答えは、アンビバレントである。そうかもしれないし、そうでないかもしれないというものだ。これは一体、いかなる意味においてなのだろうか。これについて説明するため、以下では、観光研究者 T. エデンサーによる「パフォーマンス性」を主要概念として批判的に導入することにしたい¹⁷⁾。

近年のツーリズム・モビリティーズ研究においては、観光がパフォーマンスを媒介として日常世界と密接につながっていることを明示し、日常性と非日常性の境界を問い直そうとする試みが模索されるようになった。エデンサーもこの問題意識を共有しながら、「パフォーマンス性」から観光を議論する。彼は、社会学者 E. ゴフマンの議論を参照しながら、日常世界がパフォーマンスによるプロセスから形成されているのと同じかたちで、観光もツーリスト、観光業者、メディアなどのパフォーマンスによるプロセスから形成されているのだと主張している。

ダークツーリズムにおいても、そのことはみてとれる。先に挙げたベルリンのチェックポイント・チャーリーの事例においても、再建された木造の小屋の前で国境警備兵のパフォーマンスをする観光スタッフと一緒に、多くのツーリストたちがポーズをつけ写真を撮るパフォーマンスを行っていた。観光スタッフとツーリストのパフォーマンスが重なり合うことで、チェックポイント・チャーリーという場所性が生じているのである。

ほかにも、英国スコットランドのエディンバラで実施されるゴーストツアーにおいても、ダークツーリズムとパフォーマンスの結びつきをみてとることができよう。これは、エディンバラにおける歴史の闇（ダークネス）をツアースタッフの解説をききながら見てまわるツアーであり、エディンバラにつくられた地下都市も見学する。18世紀前半エディンバラでは人口過密となり、住居を確保することさえ困難な状況となった。そのため貧困層の人びとの一部は地下に部屋をつくり、そこで暮らしていたのである。地下都市の中は下水も完備されておらず、非常に不衛生であったため、ペストの流行をおそれた権力者によって地下に暮らす人びとは閉じ込められたまま出入り口をふさがれてしまった。こうした場所をはじめ、エディンバラの暗黒部をみてまわるというものである。その際、ツアースタッフは黒いマントをはおりながら声色もおどろおどろしく解説をつけ、ときにツーリストの一人を指名し、前に出てこさせて鞭をうつ真似をしたり、しばり首の恰好をさせたりする。指名されたツーリストもそれに応じて絶叫したり、こわがるふりをしたりと、さまざまなパフォーマンスを行う。それゆえエディンバラのゴーストツアーもまた、ツアースタッフとツーリストのパフォーマンスによって形成されていると言えよう。

このように観光（本稿ではダークツーリズム）とパフォーマンス性との結びつきは非常に緊密なものである。この点を指摘し、さらにエデンサーは議論を先にすすめる。

彼は、観光の空間＝観光の舞台（tourism stages）を大きく2つに分類する。ひとつは「隔絶した空間（enclavic space）」である。これは、パッケージツアーのように、高級ホテルに宿泊し大型バス



図8 エディンバラのゴーストツアー
資料出典：筆者撮影（2017.08.10）



図9 しばり首にされるふりをするゴーストツアーのツアーリスト
資料出典：筆者撮影（2017.08.10）

で移動するなどツーリストにとって快適な空間が準備されており、「環境の泡 (environmental bubble)」のもとで現地における他者とかかわりが最小限におさえられている観光の空間である。もうひとつは「混成的な空間 (heterogeneous space)」である。ここでは、ツーリストは「環境の泡」から出て、現地における他者とかかわりをもつようになる。観光はパッケージ化されたりプランをつくられたりしておらず、その時々状況によって変化するようになる。

エデンサーは、これら2つの観光の舞台が異なるモードのパフォーマンスによって各々導かれていると言う。彼によれば、「隔絶した空間」を導くのは「形式的に儀礼化されたパフォーマンス (disciplined rituals)」である。このパフォーマンスでは、やり方も組織化されており、どの時点でどのようにふるまうのかもほとんど決められている。これに対し、「混成的な空間」を導くのは「即興的なパフォーマンス (improvised performances)」である。これは、ツーリストが現地の人びとや観光業者とのあいだで濃密なかかわりを持ちながら、型にはまらず行われるパフォーマンスである。さらに、もうひとつ剰余物として、「どちらの空間にも結びつかないパフォーマンス (unbounded performances)」もあるとエデンサーは述べる。

ダークツーリズムにおいても、「混成的な空間」の形成は非常に重要な課題となるだろう。確かに、上でも述べたように、他者の“死”や“苦しみ”を理解することは不可能である。だが“死”や“苦しみ”を背負ってきた他者とかかわり、慈しみ、愛おしみ、彼らとともに生きることはできる。「混成的な空間」において、“死”や“苦しみ”を背負ってきた他者と積極的にかかわり、パッケージ化されていないものを学んでいくことはダークツーリズムにとって必要なのである。

そういった空間を導くうえで、パフォーマンスが有する意義は強調されるべきであろう。「混成的な空間」の中で他者とかかわり、慈しみ、愛おしみ、彼らとともに生きることをめざしていこうとするならば、ツーリストや観光業者は、そのための「ふるまい＝パフォーマンス」を学ばねばならない。もし学ぶことができないとするならば、ダークツーリズムは他者の“死”や“苦しみ”を観光商品として売り買いし消費するものになってしまうだろう。「混成的な空間」という観光の舞台は、パフォーマンスこそが導くのだとするエデンサーの指摘は、ダークツーリズムを考察するうえでも非常に示唆的である。

では「混成的な空間」を導き形成する「ふるまい＝パフォーマンス」とは、エデンサーが言うように「即興的なパフォーマンス」なのだろうか。エデンサーは「即興性の有無」を軸にすえたのだが、実は「隔絶した空間」と「混成的な空間」を導くパフォーマンスの軸はそこにはないように思われる。では、その軸は何か。

それは「異化効果の有無」ではないだろうか。「異化効果」とは、ドイツの劇作家 B. ブレヒトによって彫琢されたパフォーマンスの概念である。これは、俳優が役を離れてその批判を行い人びとが舞台上の出来事に対して感情的に同化できないようにするなどして、人びとが単なるオーディエンスとして演劇をみるのではなく演劇の枠組みを揺るがせ、人びとを絶えず巻き込みながら演劇の枠組みを自明視させず考えさせようとする方法によってもたらされる効果のことを言う。

ダークツーリズムでは、他者の“死”や“苦しみ”を「理解」することはかなわない。だが、ツーリスト自身の日常を揺るがせ、再考を促し、他者の“死”や“苦しみ”に寄り添い、大切にするための「ふるまい」を学ぶことはできる¹⁸⁾。このことは、異化効果を有するパフォーマンスこそが可能とするのではないだろうか。グローバルに拡大したオフショア化された市場の恩恵に浴している人びとの日常をいったんカッコにいれさせ、その状況を再帰的に考え直させていくことで、ツーリス

トはダークツーリズムを通じ他者と共生する技法を学ぶのである。

VI むすびにかえて——平和の記憶を紡ぐ媒体（メディア）への可能性——

以上、ダークツーリズムには、ツーリスト自身の日常を揺るがせ、再考を促し、他者の“死”や“苦しみ”に寄り添い、大切にするための「ふるまい」を学ぶ可能性があることをみてきた。その際には、「異化効果」を有するパフォーマンスをツーリストはもとめられることになるだろう。みずからを単に「ゲスト」という“状態”にく安住させせるのではなく、自らの日常をいったんカッコにいれ、揺るがせ、再考し、学ぶという“プロセス”のなかに＜投企＞してはじめて、ツーリストは観光によって他者と共生する技法＝「ふるまい」を身につけることができるようになる。

その際、ダークツーリズムによっては他者の“死”や“苦しみ”を「理解」することは決してできない。私たちは、そのことをはっきりと自覚するべきである。「理解」が可能であると安易に主張することは、敬虔な祈りや悼みが備わっていたとしても、他者の“死”や“苦しみ”から目をそむけることを意味する。

他者の“死”や“苦しみ”を「理解」することは確実に不可能だ。だが、それでもなお、“死”や“苦しみ”を背負ってきた他者に寄り添い、大切にするための「ふるまい」を学ぶことは可能である¹⁹⁾。ダークネスが構築される際の様ざまな社会的立場のせめぎあいをプロブレマティックとして可視化するとともに、ツーリストが以上のことを追求し、みずからを絶えず変化させ続けるプロセスに投げ入れたときに、ダークツーリズムはその可能性を开花させ、平和の記憶を紡ぐ媒体（メディア）となっていくのではないだろうか。

注

- 1) Sharpley, R. and Stone, P. eds.: *The Darker side of travel: The theory and practice of dark tourism*, Channel View Publications, 2009.
- 2) 井出明「ダークツーリズム」、(大橋昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治編著『観光学ガイドブック——新しい知的領野への旅立ち』、ナカニシヤ出版、2014、所収)、216頁。
- 3) 井出明「ダークツーリズム入門 #1 ダークツーリズムとは何か」、ゲンロンエトセトラ7、2013、51頁。
- 4) 東浩紀編『福島第一原発観光地化計画』、ゲンロン、2013。
- 5) Stone, P.: A dark tourism spectrum: Towards a typology of death and macabre related tourist sites, attractions and exhibitions. *Tourism: An Interdisciplinary International Journal* 54 (2), 2006, pp.145-160.
- 6) ① Foley, M and Lennon, J.: Editorial: Heart of darkness. *International Journal of Heritage Studies* 2 (4), 1996, pp.195-197、および② Foley, M and Lennon, J.: JFK and dark tourism: A fascination with assassination. *International Journal of Heritage Studies* 2 (4), 1996, pp.198-211.
- 7) Lennon, J. and Foley, M.: *Dark tourism: The attraction of death and disaster*. Cengage Learning, 2010.
- 8) フーコー、M. 著、渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物——人文科学の考古学』、新潮社、1974。
- 9) 田村慶子・本田智津絵『シンガポール謎解き散歩』、中経出版、2014、122-128頁。
- 10) 福岡良明・山口誠『「知覧」の誕生——特攻の記憶はいかに創られてきたのか』、柏書房、2015。
- 11) 山口誠「メディアとしての戦跡——忘れられた軍部・大刀洗と『特攻巡礼』」(遠藤英樹・松本健太郎編著『空間とメディア——場所の記憶・移動・リアリティ』、ナカニシヤ出版、2015、所収)、193-212頁。

- 12) Buda, D. M.: The death drive in tourism studies. *Annals of Tourism Research* 50, 2015, pp.39-51.
- 13) 中山元『フロイト入門』、筑摩書房、2015。
- 14) Urry, J.: *Offshoring*. London: Polity, 2015, p.175.
- 15) 立木康介『露出せよ、と現代文明は言う——『心の闇』の喪失と精神分析』、河出書房新書、2013、29頁。
- 16) これについては、以下の文献が重要である。市野澤潤平「楽しみのツーリズム——災害記念施設の事例から考察するダークツーリズムの魅力と観光経験」、『立命館大学人文科学研究紀要』110、2016、23-60頁。市野澤はスーザン・ソンドクの議論をふまえて、「ダークツーリズム」に「他人の苦しみを『覗き見る』行為」という側面があることを適切に指摘している。他にも次の文献を参照のこと。古市憲寿「『ダークツーリズム』のすすめ」、『新潮45』12月号、2012。
- 17) Edensor, T.: Staging tourism: Tourists as performers. *Annals of Tourism Research* 27 (2), 2000, pp.322-344.
- 18) ここで本稿が問題としているのは、L. ヴイトゲンシュタインによる「言語ゲーム論」に通底するものである。ヴィトゲンシュタインによる「言語ゲーム論」については、以下の文献を参照のこと。橋爪大三郎『はじめての言語ゲーム』、講談社、2009。私たちは、他者の“死”や“痛み”を起点として、それを「理解」することはできない。どのように厳密に定義しようが、どのように真摯な気持ちをもとうが、それは他者の私的感覚にとどまるものである。したがって私たちは「ふるまい」＝「パフォーマンス」を起点に、それによって“死”や“痛み”を背負ってきた他者と生きる技法を学ぶことができるだけなのである。誤解をおそれず言えば、私たちは、“死”や“痛み”をめぐる「他者に寄り添い共生するゲーム」を学び続けるしかないのである。そして、その「ふるまい」＝「パフォーマンス」が適切なものであるかどうか最初にも最初に確証があるわけではなく、つねに結果として理解できるのみなのである。
- 19) ただしツーリストが自らの日常を揺るがせ、再考し、学ぶという“プロセス”のなかに＜投企＞できるかどうか考えずに、ツーリストの可能性を称揚するのは観光の限界を見誤る危険性が大きいと言わねばならない。以下の文献についても、この点から批判的に読解していく必要があるだろう。東浩紀『観光客の哲学』、ゲンロン、2017。

(本学文学部教授)

The Possibilities of Performative Dark Tourism
— Through a Critical Consideration of the Concept of “Performativity” —

by
Hideki Endo

Dark tourism has problems such as the “violence of the gaze towards ‘death’ and ‘suffering’” and the “commercialization of ‘death’ and ‘suffering’”. On the other hand, when tourists project themselves in the “process” where they shake, rethink, and reflect on their daily life rather than simply think themselves in their “state” as a guest, they can learn how to perform for living with others through dark tourism. Of course, as L. Wittgenstein points out, we cannot “understand” others’ “death” and “suffering”. No matter how sincere our intentions may be, others’ “death” and “suffering” remain the personal feelings of others. Therefore, through performances with a “*verfremdung* effect”, we are just able to learn how to perform for living with others who carry the burden of “death” and “suffering”. When that becomes possible, we should be able to make dark tourism a medium for weaving the memories of peace.